

大学生のための「社会常識」講座

——社会人基礎力を身に付ける方法——

松野 弘 編著 (ミネルヴァ書房, 2011年7月発行, 1890円)

Book Review

Matuno, Hiroshi: *The Key Lectures on Social Common Sense for College Students*



柏木 仁

KASHIWAGI, Hitoshi

はじめに

常識とは社会でどのような役割を果たしているのか。社会人にはなぜ常識を身に付けることが求められるのだろうか。社会常識はなぜ崩壊しているのか。これらの問いに答え、さらには、社会常識の基礎となる知性を磨くための道標を示したのが、本書である。本書の著者は、人間は高度な社会構造を構築して生活する動物であり、高度で複雑な社会の形成には、その構成員である個々人に、社会を構築していくための社会的な知性＝「社会知」を持つことが求められ、この社会知の標準的、かつ、規範的な知の一つとして常識が存在する、と説く。さらに、人間が社会の構成員として等しく共有していなければならない最も基本的な共有知、ないし、倫理規範であり、社会の潤滑油である常識は、人間が社会的動物として生きるための倫理的なミニマムの要件である、と続ける。このように、人間社会が円滑に機能し、その質の向上を図る上で不可欠な常識が、われわれの社会から

失われつつあるとの指摘は特に新しいものではないかもしれないが、最近その傾向が顕著になっているのは確かである。

本書の目的は、社会常識を身に付けた健全な大学生の育成の一助になることである。そのために、大学生が身につけるべき社会常識というものについて、それを体系的に示し、かつ、その習得のための実践的で具体的な講座を提供している。はじめに社会常識の基礎について明快な解釈を提示したのち、大学生の社会生活に関連の深い社会常識を、1) 人と人の関係における基本的な「社会常識」(コミュニケーション力等)、2) 大学生活における「社会常識」(学ぶ・働く・友人との付き合い等)、3) 人と社会の関係における「社会常識」(社会とのかかわり方等)の3つの観点から、6つの講座の中で議論している。各講座の議論は、大学生の社会生活で身に付けておくべき常識やマナーが、キーワードを提示する形式でわかりやすく議論され、さらに、それらを習得するために必要な姿勢、思考、具体的な方法が丁寧に示されている。大学生が社会常識を自律学習するためのわかりやすい教本に仕上がった本書は、その目的を

十分に果たしている。

本書の背景にある問題意識

本書が企画された背景には、大学教育に携わる者が共有する問題意識がある。それは大学生の学力低下、大学全入時代の到来、そして社会人基礎力などで表現されている大学卒業後に最低限身につけておくべき社会人としての常識力の低下、である。

まず、学力低下であるが、本書では、大学生の学力低下が客観的データと共に議論されている。例えば、所属学部で学力低下がどれだけ問題になっているか、という Benesse 教育研究開発センターが2005年に行ったアンケートで、8%の教員が「授業が成り立たないなど深刻な問題になっている」と答え、「やや問題」と回答した教員は53%にのぼったという結果が紹介されている。問題はこういった状況が授業進行の妨げになっているだけでなく、大学生の学力不足を補うためのしわ寄せが、大学教育に及んでいることである。本書では実際に補修授業を実施する大学が増えている、と現状が報告されている。

さらに、今日の大学生の学力低下の原因の一つとして、本書では、ゆとり教育の弊害についても議論されている。学校週5日制や平成14年度施行学習指導要領の導入で、いわゆる「ゆとり世代」が大学を受験する年齢に達した。ゆとり教育とは、詰め込み教育の弊害に対する反省から、自ら学び、主体的に考えることを重視する教育であったが、この教育を受けた世代に対して、皮肉にも学力の低下が指摘されているのである。

次に、大学全入時代の到来であるが、本書では、この点についてもデータが示されている。平成21年度学校基本調査速報によれば、わが国の平成21年時点での大学・短期大学への進学率は56%を超

え、大学・短大の合格率は90.4%にまで上昇しているという。まさに、実受験者数が入学者定員と同じになる時代の到来である。本書では、その一因として、少子化の進行だけでなく、一億総中流意識に基づく安易な大学進学がある、と指摘し、経済的に大学進学が可能となる中流意識層が増えれば、大学へ行くことが当たり前という意識につながり、まわりが行くから自分も行く、という安易な大学進学の考え方の根底となる、と説く。

最後に、本書の主題でもある社会常識であるが、本書は、非常識の時代に社会常識を社会知教育として意識的に学ぶことが大切であるにもかかわらず、その認識の低さを嘆いている。そしてその原因として中流意識と娯楽志向性を挙げ、中流意識は先に挙げた安易な大学進学だけでなく、そもそも学ぶ姿勢の低下を招いた、と説く。豊かな生活を背景に、「上でもない下でもない」という現状肯定の意識を生み、社会常識をより学び、より高めるという意欲と姿勢を失わせ、そこにテレビ人間が急増、娯楽志向性の広がり相まって、社会常識の崩壊を招く、という解説は大いに説得力がある。

本書の構成と各章が扱う内容

プロローグでは、社会常識とは何かについての議論が行われている（社会常識に関する著者の解釈は、筆者が特に興味深いと考える内容であり、のちに詳述する）。今日のITの発達は、コミュニケーションの手段の飛躍的向上につながったが、コミュニケーション能力の向上という本質的な部分には結びついていない。社会常識はその共有を通じて、コミュニケーションによる社会の構築を促している。社会常識は社会的知的レベルを示すバロメーターでもあり、一般教養や社会倫理としての社会常識の向上はアリストテレスのいう「共

同体の知（社会知）的水準も高まりにつながり、国民の知性の向上は健全な民主主義的社会の育成と発展につながる、と説く。

これ以降、講座1から6までは実践的な内容が分かりやすく具体的に示されている。

講座1では、大学生活の「社会常識」について述べられている。例えば、学生の品格というキーワードを基に、TPOにふさわしく振る舞うことの必要性が述べられ、学生生活を送る上での社会常識に関する詳細なガイダンスが紹介されている。大学生が自律的に学生生活を送るために、有効な情報である。

講座2では、企業社会の「社会常識」が議論される。組織人、企業人になるとはどういうことか、雇用を取り巻く環境の変化を踏まえ、今日の企業組織のメンバーとしての在り方が丁寧に解説されている。また、社内でのコミュニケーションについて、ハウレンソウ（報告、連絡、相談）と言われるフォーマルなコミュニケーションと共に、インフォーマルなコミュニケーション、企業の社風・文化を形成し、それがその企業力の一部となること、あるいは、内省やモデリングなど、組織論をベースとした内容が随所に見られ、平易な表現で学術的な議論に基づく有益なアドバイスが提示されている。

講座3は、人付き合いの「社会常識」に関する章である。人は人間同士のやりとりの中で、自分探索を通じて成長する。そのためにどういう姿勢でどう行動すればよいかが提示されている。中でも、人付き合いのコンテクストである文化や風土の重要性を指摘、今日、グローバル化の時代にあって、ホモジェニティの風土を持つ日本人は、特に意識的に醸成しなければならない社会常識であるとの指摘には大いに同意する。

講座4は「コミュニケーション」の方法のための「社会常識」を扱う。講座3にも共通するが、コミュニケーションとは、実は人の成長に不可欠

だということが読み取れる章である。著者は、的確に他者に伝える力、他者を理解する力が現代人に求められると説く。

講座5はIT生活の「社会常識」に関する議論である。本書のはじめに、IT革命でコミュニケーションのツールは飛躍的に発達したが、同じように能力が発達したとは言えない、との問題意識が述べられている。本章を読むと、情報リテラシーとは、情報を活用する能力とそれをいかに正しく使いこなすかという良識も必要だという指摘等、単にツールを使いこなすだけでなく、ここにも大いに社会常識が必要になることを思い起こさせる。

講座6はコンプライアンス（法令遵守）の「社会常識」が議論される。本章では、コンプライアンスを、社会や学校などあらゆる団体・集団の中で、人が幸せに生きていくために必要な一定のルールを守ること、と捉えられている。そして、大学の構成員たる学生は特別な存在でもなく、市民として社会の監視の目に晒されているのであり、学生も、人として守るべき基本を理解し行動することが強く求められている時代である、と説く。

最後に、エピローグとして、著者が述べる知の基本要素「読む」「見る」「書く」をベースに、大学生のための「社会常識」を身に付ける10の原則が提示されている。読む、見るについては、ニュースの視聴、新聞を読む、読書をする、講演会に進んで参加するなど、知のインプットの勧めを、書くについては、投稿やメモ取りなどの知のアウトプットを勧め、またゼミ等を通じたOG/OBとの交流も勧めている。なお、この10の原則とは、ハウツーものではなく、社会常識の土台となる知性をいかにして磨くかに主眼が置かれている、と著者は強調する。

このほか、巻末には資料として、社会人基礎力に関する議論と、大学生による犯罪の推移と問題点に関する議論が加えられている。

常識に関する説得力ある議論

筆者が特に注目した点は、社会常識に関する説得力ある明快な議論であった。常識とは何かという基本的問いに対して、著者は、アリストテレスの著書「靈魂論」から「共通感覚」を引用し、人間には、五感のような感覚器官にとらわれる感覚とは異なり、五感に限定されない共通の感覚が存在するという主張から議論を始めている。そして、アリストテレスの共通感覚は五感に限定されない感覚であり、個人差のある五感を超越して、共通に認識することが可能な共通感覚という考え方が「常識」の原点であるとしている。この原点から出発し、18世紀、カントがこの共通感覚を常識という概念でとらえていることを紹介し、家庭生活をはじめとしたさまざまな社会において健全な生活を行うために、通常持っているべき認識や知識が「常識」ということになる、と述べる。

その上で、社会常識の3つの構成要素として、知識 (Knowledge)、良識 (Good sense)、見識 (Judgement) を挙げている。常識を構成するこの3要素の中で、良識と見識はその質が問われるのに対し、知識は知の量が重要となる。すなわち、社会生活を営む上で最低限必要とされる基礎知識は、一定程度の量が必要なのである。「読み・書き・算数」の基礎知識に関する教育が義務教育期間に集中して行われるが、常識の他の2要素である良識や見識を働かせるにも、知識が不可欠である。常識の要であるのが知識なのである。従って、つめこみ偏重は是正されるべきであるが、知識詰め込み型教育自体が否定されるべきではない、との著者の主張には大いに同意する。知識詰め込み型教育に対する批判とは、本来、知識を詰め込むこと「だけ」が教育とするアプローチが問題なのであって、それが「知識に社会常識としての、一

定程度の量が必要である」ことを否定する根拠にはなりえない、という議論は、大学教育に携わるものとして大いに共感する。

知識を用いて働かせるべき良識と見識については、次のように定義されている。まず、良識であるが、社会常識の倫理的価値であり、時代に左右されず、人間としての正しい考え方や健全な判断力、倫理や道徳観などの社会正義に裏付けられた知性や感性、とされている。見識は、物事の本質について公平な見方ができることで、主観的要素が強い。良識が普遍的な性格を帯びているのに対し、見識は時代や地域によって異なる、と説明されている。そして、知・良・見のバランスが重要であり、どれが欠けても常識にはなりえないと説く著者のこの常識に関する明快な解釈は、大学生も直観的に理解できるものであろう。

もう一点、筆者が注目した点は、常識の崩壊の背景に関する洞察である。昨今顕著に見られる非常識化現象の理由として、著者は、娯楽志向性と自己閉鎖性、中流意識の進行、と分析する。1950年代、テレビ時代の到来とその普及の行く末を「一億総白痴化」現象と批判した時代状況があった。わが国の高度経済成長期への過程とその後の停滞期で、娯楽志向性と自己閉鎖性が社会に広がっていった。娯楽志向性が、社会常識という教養や物事を論理的にとらえていくという志向性を失わせ、感性のままに生きるという脱思考化現象を生みだした、との分析は極めて説得力がある。加えて、中流より上を目指さないということは、社会常識を学び高めるといふ、知性に対する向上的姿勢も不要になる可能性があるとして、「一億総中流意識」が進行したことも、社会常識を失わせる要因の一つになったと分析している。今後、わが国の共同体の知を継続的に高めていくためには、社会を構成する一人ひとりが、自ら学び、自ら考え、自ら行動し、自ら省み、再び自ら求める、という人間としての成長サイクルを意識し、励行し

なければならない。

大学の就職予備校化への警鐘

先ごろ日本経済新聞に「未熟補う就職授業」(日本経済新聞 2011年11月4日朝刊)という記事が掲載された。「景気の不透明さはその深刻度を増す中で、企業の採用動向はなかなか上向かず、学生や保護者は就職に強い大学をますます評価するようになった。一方で、大学進学率は50%を突破し、大人になりきれない未熟な学生があふれる。文部科学省は、そのような未熟な学生の社会化を後押しすべく、社会で働くために身に付ける必要がある力を就業力と名付け、大学の就業力養成に関連する取り組みに補助金を出す事業を2010年度に開始、中にはオトナ学を必修とする大学もある。しかし、就職のための訓練だけでは社会の求める力を育てきれない」というこの記事では、大学の「就職予備校」化が進む現状が浮き彫りになっている。

経済産業省は2006年から、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として社会人基礎力を提唱している。この社会人基礎力について、著者は、社会で働くためのスキルの基準が示されたことで、努力目標が明確化されたという点については評価できるとしているものの、これを大学教育に組み入れることによる大学の就職予備校化には注意が必要であると説く。

その上で、著者は、大学本来の目的である「学問的な真理の探究」と実践的な社会人基礎力とを有機的に関連させるアプローチについて知恵を絞ることが重要だと論じる。そして、学問的な真理の追求という大学教育の原点に立ち、社会人基礎力のような実践的教育を補完的に利用していくとの認識の下、大学生に社会倫理性の高い知性を教授していくことが必要だと説く。大学は知の探求の場であり、就職のための実践的スキルを開発することを唯一の目的とするものではない。このことを、大学教育に携わる者は改めて肝に銘じる必要があるだろう。

おわりに

ゆとり教育による学習時間の低下は知識不足を招き、非常識化の原因となっている。大学生は、社会生活のための常識に最低限必要な基礎知識をまず獲得し、その上で、高い社会倫理性をもった社会人になるための良識を身に付ける必要がある。グローバル化がすさまじい勢いで進展していく中で社会人として生きていくことが運命付けられている今日の大学生は、知識に加え、著者が論じるように、世界に通用する普遍的価値観としての良識と、世界によって異なる価値観としての見識とを磨かなければならない。

(受付2011年11月15日 受理2012年2月29日)